

高病原性鳥インフルエンザ疫学調査チーム第2回検討会の概要 (平成29年5月11日開催)

平成28年11月から平成29年3月にかけて我が国で発生した高病原性鳥インフルエンザ(H5N6亜型)について、現地調査、分離ウイルスの遺伝子解析等に基づき、疫学調査報告書の取りまとめに向けた検討を行った。

1. 発生の概要

(1) 発生農場

- ・第1回検討会後に発生が確認された佐賀県、宮城県及び千葉県での事例について検討を行った。
- ・平成28年度における発生農場は北海道から宮城県にかけて全国に分散しており、野鳥での広範囲な発生状況と類似していると考えられた。
- ・発生農場の特徴として、家きん舎の近隣に池や沼、川がある場合が多い傾向が確認された。

(2) 分離ウイルスの特徴

- ・我が国で確認されたウイルスは、遺伝子解析の結果から韓国で確認されたウイルスと由来が同じであると考えられた。国内外での家きんや野鳥から検出されたH5N6亜型ウイルスとの遺伝子レベルでの比較により、平成28年度には、少なくとも5系統のウイルスが国内に侵入したと考えられた。
- ・このうち、少なくとも4系統のウイルスが韓国において確認されているウイルスと重複していると考えられた。
- ・感染実験の結果から、過去のH5N1ウイルスと比較して、鶏に関しては、感染性、致死性が低下している可能性が考えられたが、各事例とも死亡数の増加が確認されたことから、早期通報において死亡数の増加が指標として引き続き重要であると考えられた。

2. ウイルスの侵入経路

(1) 国内への侵入経路

- ・ウイルスは、渡り鳥により、過去の事例と比較して早い時期(11月初旬)から広く日本に持ち込まれたと考えられた。また、韓国でも、我が国で確認されたウイルスと極めて近い遺伝子型のウイルスが野鳥及び家きんにおいて広く確認されていることから、日本全域、韓国を含む環日本海の地域において、ウイルスが広く持ち込まれたと考えられた。
- ・宮城県及び千葉県での発生を踏まえ、渡り鳥の春の渡りの時期においても警戒が必要であることが再確認された。

(2) 家きん舎への侵入経路

- ・発生状況、飼養衛生管理の状況等からは、現在のところ、特定の経路から家きん舎内にウイルスが持ち込まれたことを示す情報は得られていない。
- ・発生農場の特徴として、家きん舎の近隣に池や沼、川がある場合が多い傾向が確認された。このような農場では、周辺に野鳥等の飛来が多く家きん舎周囲にウイルスが増加している可能性があるため、家きん舎内への野生動物の侵入防止対策はもちろんのこと、人が家きん舎に出入りする際、靴底や持ち込む物も含めた消毒等のさらなる徹底が必要と考えられた。

3. 今後の対応

本日の議論も踏まえ、本年6月又は7月を目途の公表を目指し、疫学調査報告書の作成を進めることとされた。